

# 草の芽句会たより

NO,96  
28,8,4

緑蔭の佇み憩ふ風を待つ  
城山の至るところ蟬時雨

貞子

駆け抜ける学生の声白い靴  
シュルシュルとロボット掃除機夏座敷

節子

草木の茂りの深し夏あざみ  
秋草の咲き初む気配三の丸

純子

一刻を涼しきベンチひとりじめ  
搦手に夏萩の花みつけたり

禮子

万緑を映し豊かに濠の水  
仙人草咲きたる径をとりにつけり

剋子

中干しの土ひび割れて稲青む  
中干しの終りて穂水渡し水

貞

盆行の僧の袈裟問う二年生  
お仕舞の土用けいこの音低く

範子

出席者 川原 氏家 森 馬場 小山  
投句者 真鍋 吉崎

朝から猛暑である。「今日は早目に戻らんと熱中症になるで」「日焼け止め塗ってくるのを忘れたがな」  
ぼやきながらいつもの径を辿る。ウォーキングの人が  
三々五々と速足で通り過ぎる。いつもの風景である。  
二の丸跡の石垣を見上げる場所に絵を描いている女性が  
一人。パステル調のやさしい絵である。「好きなので」と

一言。お互いに好きならばこそ暑さの中 城山へも上れるというもの。納得である。  
帯曲輪には涼しい風が吹いていた。海からの風がここまで届くみたい。ほっと一息をつく。  
足元に夏草が花をつけている。もうすぐ立秋。早めの秋を期待して帰途についた。

